

中学校教材

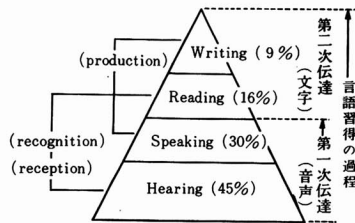
言語活動を高める Classroom English

第1研修部 中 沢 剛 太 郎

1. 言語の本質と Classroom English の有用性

文字という communication の media を持たない未文化の時代（未開時代や幼時期）にあっては、body-language のような他の手段を差しひいても、100%近く、音声言語の主体であったはずである。文字が使われ、文明が進み、情報化社会といわれる今日になっても、われわれの言語生活の主体はやはり音声であることに変わりはない。

このことについて、右図はわれわれの一般的な言語生活における H, S, R, W, の割合を示している。



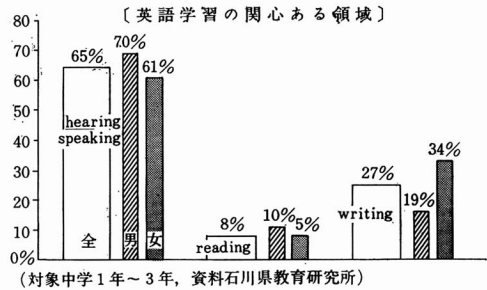
この表から言語生活の75%は音声を通しての communication (hearing, speaking) であり、さらに45%を占める hearing の活動が言語生活の基盤になっていることがうかがえる。かつて、Palmer は、「言語の本質は音声である」といい、習得の過程では、①“ears before eyes” ②“reception before production” ③“oral reception before reading”と強調した。

つまり言語習得の過程では、recognition なくして production はありえず、音声を離れて reading や writing の活動は考えられないということである。ところで、実際には、西村稠氏によってこのことばが使われてから(1926年)すでに久しいが、その後の teaching technique や teaching method の華やかな理論の陰にあって、ともすれば、この最も素朴な、そして最も身近な classroom English の活用が discussion の対象外に置かれてきたのは遺憾である。しかし言語の実際の運用を重視した今日の語学教育にあって、classroom Englishこそ、言語活動を有効に進める効果的手段として、再認識されなければならないと思う。

2. 生徒の興味ある領域

一方立場を変えて、学習者である生徒が、三領域の中でいずれに興味を有しているのかを考えてみたい。次図によれば圧倒的に hearing, speaking に集中していることがわかる。理由の主なもの、「外国の人の話を聞いてわかる」「外国の人と自由に話したい」という願望

である。この事実から、生徒の興味を持続させながら学習を進めてゆくためにも classroom English は意味なしとしない。



3. Classroom English の展開

(1) 活動の効用

① classroom English はすべてが音声であり、しかも、hearing の要素を多く含むので、basic training の機会として適切である。

② classroom English は、各単元の到達目標そのものでない場合も多いが、この活用によって、授業の進行の中から自然に English atmosphere が醸成され、smooth な運用が図られるので、授業運営にすぐれた促進剤としての役割を果たす。

③ 間接的 situation は、visual aids が普及された今日でもおのずから限度があるが、classroom English は、直接的 situation を伴った活動であり、したがって、生きたことばの運用として、英語に習熟する近道である。

④ classroom English が機に応じて反復されれば、前時に recognize されなかった生徒には、feed back の chance となり、recognize された生徒には drill の形で、ことばが身につけられてゆくことは疑いない。

(2) 活用の space

では、classroom English が限定された50分の単位時間のどこで活用されたらよいか、次の表を参考にして考えてみたい。これは1年～3年の5つの学級の、ある英語授業を再生分析して得た結果である。50分の中で教師および tape から発せられた音声の総数は、1年A組を例にとると英文のべ205文、英語句のべ146語、日本語のべ267文、語句のべ58語となっている。下の数字はこの中から本時の material に直接つながる音声、つまり text 内にある英文や英語の語句、および日本語による語意、文意、語法の説明などを差しひいた残りの音声のべ総数である。